

森のちやれんがニュース

2019 春

Newsletter vol.15



第13回企画テーマ展

『アイヌ民族の文化財を未来へつなぐ —博物館のはたす役割—』を開催 (2019年2月8日～4月7日)

北海道博物館には現在18万件程の資料が収蔵されています。この膨大な資料の数々を未来へ残すために、博物館ではどのような取り組みがなされているのでしょうか。この企画テーマ展では、アイヌ民族の文化財を切り口に、文化財を長期にわたり保存・活用していくための環境整備や、最新の機器を使った見えない部分の劣化状況の診断、それを応用した制作技術の再現など、博物館の裏側で行われている活動を紹介しました。

展示場では、お客様が普段見ること

のできない博物館の姿に驚く様子が多く見受けられ、同時開催の2020年にオープンする「国立アイヌ民族博物館」と「民族共生象徴空間」の紹介展示も好評でした。(研究職員 鈴木明世)



「国立アイヌ民族博物館」と「民族共生象徴空間」の紹介展示コーナー



CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
古文書が語る松前藩政期の商場交易
- ③ 展示/イベント協力
北海道博物館の資料やノウハウが、場所を変えて活躍しています
- ④ 研究活動紹介
民具を通じてアイヌ民族の近現代を考える
トピックス
- ⑥ 冬のはっけんイベント 大好評
国立科学博物館・巡回ミュージアム
「生命のれきし」を開催
- ⑦ アイヌ民族文化研究センターだより
「清野写真館旧蔵写真」その後
- ⑧ 活動ダイアリー

収蔵資料紹介

古文書が語る松前藩政期の商場交易

東 俊 佑

研究部歴史研究グループ 学芸主査

当館が所蔵する「フラージェム家資料」のなかに、松前藩家臣の知行所内の地名と特産物を書き上げた古文書があります。形態は横帳・仮綴で、表題はありません。また、水染みや破れ・裂けなどが各所にあり、紙ももろくなっており、資料の状態としてはあまり良いものとは言えません。また、資料の作製年代がわかるような記載はありません。

中身を見てみると、例えば、「青山園左衛門殿知行所」の項には、「やまこしない」「ゆうらつふ」「くんぬい」「おしやまんへ」などと地名が記され、「出物春鱈、鮭、寄こんぶ、たら、秋味川所運上、御公儀十月時分臘臍御役人松前方おしやまんへへ相立」と産物に関する情報が書かれてあります。松前藩の知行制度は商場知行制と呼ばれ、家臣に知行所内でのアイヌ民族との交易権を認めるものでした。この文書からは、青山の知行所において、マス、ニシン、コンブ、タラ、サケ、オットセイが主な特産物であったことがわかります。

一方、「御領 そうや」の項には、「ウエン泊リト云」とあり、「出物油、棒鱈、いりこ、あつし、羽、ゑぞ錦、膽、ゆう別、目なし方商ニ参ル」と書かれています。「油」はサメ油かアザラシ油、「棒鱈」は物干しに掛けて乾燥させたタラ、「いりこ」はお湯で茹でて天日に干したナマコ、「あつし」は樹皮製の衣服、「羽」はワシの尾羽、「ゑぞ錦」は中国

製の絹織物、「膽」はクマの胆のことです。「ゆう別」(湧別)や「目なし」(北海道の道東地域)の人びとと「そうや」の人びとは、交易を行っていたことがわかります。

また、「近唐太嶋」の項には、「宝暦元末年、始テ御船立、御家中加藤嘉兵衛殿開闢、右嶋所名左ニ 出物油、棒鱈、いりこ、貝鯨、サンタン切、細工物、いたるへ、青玉、真羽」とあります。「貝鯨」は干したクジラ肉、「サンタン切」は中国製の絹織物、「細工物」は手工芸品、「いたるへ」はイラクサ製の衣服、「青玉」は大陸渡りのガラス玉、「真羽」はワシの尾羽のことです。松前藩士の加藤嘉兵衛が1751(宝暦元)年にはじめて船で「近唐太嶋」へ渡ったとあります。

「近藤権九殿知行所」の項には、「ビクニ」などの地名が記されています。近藤権九は、当館所蔵の「近藤家資料」によれば、近藤家8代光武のことで、1777(安永6)年に隠居しています。したがって、この文書に書かれた情報は、1750～70年代ごろと考えられます。文書自体の作製年代を確定させることは残念ながらできませんが、情報内容はこのころに絞り込まれます。このころの蝦夷地の様子を記した記録はきわめて数が少ないことから、その意味で、この文書は貴重なものと言えます。



当館には、旧開拓記念館時代に収集された「近藤家資料」「村山家資料」「林

家資料」などの近世文書を含むコレクションが収蔵されています。ここに、「フラージェム家資料」が新たに加わることになりました。

「フラージェム家資料」とは、蝦夷地場所請負人の研究者であったロバートG・フラージェム(Robert G. Flershem)氏旧蔵の文書群です。ロバート氏は、場所請負人・山田文右衛門の研究を行うなかで、北海道をはじめ日本全国を調査し、その過程で出会ったさまざまな古文書を収集しました。その研究の成果は、『蝦夷地場所請負人：山田文右衛門家の活躍とその歴史的背景』(北海道出版企画センター、1994年)にまとめられています。ロバート氏のご逝去された後は、その奥様である良子氏が、これまで大切に古文書を保管してきましたが、このたびその貴重な古文書群が当館へ寄贈されました。

古文書群は、全部で230点に整理されました。これらの大部分が江戸時代の北海道に関する古文書です。その一部は、今年度に開催した総合展示のクローズアップ展示1「古文書を読む―新着資料フラージェム家の古文書―」(2018年7月14日～12月12日)において紹介しました。近世文書の当館への収蔵は、北海道民の財産の蓄積と近世蝦夷地研究の進展に直結します。早いうちに資料目録を作成し、みなさまのご研究をはじめとする一般公開利用に供したいと考えています。



松前藩家臣の知行所と産物が書いてある文書 (収蔵番号184,693)



フラージェム家資料 (一部)

展示/イベント協力

北海道博物館の資料やノウハウが、場所を変えて活躍しています

北海道の大氷河時代を生きた動物たち

忠類ナウマン象記念館

2018.10.6~2018.11.5

ヤマガタダイカイギュウと人魚たち
~1千万年、進化のドラマ~

山形県立博物館

2018.9.22~2018.12.2

イピシシフのある生活
~アイヌとイラクサとのかかわり~

釧路市立博物館

2018.11.10~2019.1.20



ナゾの陶磁器 箱館焼と蝦夷試制

石川県九谷焼美術館

2019.2.9~2019.4.7



※抜粋して紹介しています。

研究活動紹介

民具を通じてアイヌ民族の近現代を考える

大坂 拓

アイヌ民族文化研究センター



研究職員 大坂 拓

1983年北海道生まれ。宮城県教育庁文化財保護課勤務を経て、2015年より当館研究職員。専門は考古学。写真は2018年6月に二風谷民芸組合のオヒョウ樹皮採取に同行した際のもの。

去年は、明治政府が和人地と蝦夷地を合わせて北海道と改称してから150年の節目として道内各地で多くの関連行事が開催され、その中で、アイヌ民族の歴史や文化にも大きな注目が集まりました。来年2020年4月には胆振白老町に国立アイヌ民族博物館を含む「民族共生象徴空間」のオープンが予定されており、今後、こうした関心はさらに高まっていきそうです。

各地の博物館に足を運べば、美しい文様が施された伝統衣装や豊かな自然の中での狩りを想像させる弓矢など、「伝統的」アイヌ文化を彩った様々な民具が展示されていますし、それを守り伝える現在のアイヌ民族の取り組みも様々な機会に取り上げられており、この北海道を中心とする地域に、いわゆる「日本文化」とは異なるもう一つの文化が存在することを実感することができます。しかしながら、そこに取り上げられている「伝統的」な暮らしは、どの時代の、どの地域の、どのような生活の場面を映し出したものなのかということを考えてみると、いくつかの課題が残されています。

民具の変遷

一つ目の課題として、アイヌ民族の民具について、比較的良好に研究されてきたものが衣服や儀礼具などに限られ、大部分の民具については地域や年

代による違いが良く分かっていないことが挙げられます。和人の文化にも地域差があるように、アイヌ文化と一言でいっても様々な地域差があったとされ、文化復興に関わるアイヌの人々からは自分たちの出身地のもの、なるべく先祖が使ったものに近いものの情報を知りたいという声が寄せられるようになっていますが、残念なことに、これまでの研究ではそうした声に十分こたえるに足る蓄積がなされていません。

また、世界の多くの文化がそうであったように、アイヌ民族の文化も新しい素材や技術を取り入れながら変化してきたのだ、といったことにも注意こそ向けられるようになってきたものの、残された民具から実証的にそのことを明らかにした研究もそれほど多くありません。その結果、現状では目の前にある資料が18世紀のものなのかそれとも20世紀のものなのかといった基礎的な事実を説明することさえ、しばしば困難なのです。

刀帯の変化と交流ルート

そこで2016年に取り組んだのが、アイヌ民族の男性が太刀を佩く際に使用する刀帯 (emus at) の調査でした。刀帯を対象として選択したのは、宝物の一種として大切に扱われるため、他の民具資料に比べて古いものが現存している可能性が高いこと、同様

の技法を用いた民具が多数存在するため、それらを検討する際の年代的な「モノサシ」になるだろうという見通しを持ってのことです。



素材などが異なる各種の刀帯

左から右に年代をおって変化したものと推定される

素材と編みの技法に着目した分析の結果、編みの技法は長期間にわたって大きな変化がなかったのに対し、素材は、最も古いグループではアイヌ民族が自製した糸と毛糸のような赤い獣毛を組み合わせたものが使用され、その後、藍染めなどの木綿糸を用いたものへ変化していったことが確認できました。この分析結果は、古い時期にはサハリン経由でもたらされた素材が使用され、その後に本州以南で生産された木綿糸に置き換わるという、物資の流通ルートの変化を反映したものの可能性が考えられます。

また、古いグループはサハリンから北海道に至る広い範囲でほとんど同じもの分布しているのに対し、20世紀初めには素材や使用する糸の数に地域差が生じつつあったことも、新たに確認することができました。

荷縄の変化と葬送儀礼

2017年には、荷物を背負う際に使用される荷縄 (tar) の分析を行いました。荷縄には使用目的に応じて様々なタイプが用意されていたことが知られていましたが、それぞれの地域で実際にどのような違いがあるのか、残された実

物資料から検証してみたのです。

分析の結果、サハリンと北海道の間に大きな製作技術の違いがあったことや、北海道内でも旭川周辺では他の地域と異なる特徴を示すものが使われていたことが分かりました。用途については、戦前に収集されたものには太く丈夫に作られた実用品が多数含まれているのに対して、戦後に入って収集されたものの大部分は、つくりが華奢であちこちが省略されたお葬式用のものであることが分かりました。これは、生活様式が変化して荷縄が使用される機会が減る中で、お葬式用としての役割は長いあいだ維持されてきたことを示していると考えられます。また、お葬式用の荷縄の多くは日高地方の東部で収集されており、この地域では最近まで伝統的な信仰によるお葬式が盛んに行われてきたことを裏付けるものと考えられます。



お葬式用の荷縄（上）と日常用（下）の違い
（新ひだか町収集資料）

今後に向けて

ただし、このように残された資料だけを対象にした分析では見えてこない、もう一つの課題があります。それは、そもそも博物館等に並べられた「伝統的」な民具は、アイヌ民族の生活をどのように切り取ったものなのかということです。

北海道の歴史に関する優れた概説書である『アイヌ民族の歴史』（山川出版社）を手にとれば、近世末期にはアイヌ民族の多くが和人経営の漁場での

労働に従事していたことや、明治以降には伝統的な生業に大きな制限が加えられる中、様々な職業に就くようになっていったという事実を知ることができますが、博物館に展示された「伝統的」な暮らしの中にこのような和人の関係性やそれによって生じた歴史的变化を見出すのは簡単ではありません。端的な例をあげれば、沿岸部で生業の多くの部分を支えていたはずの鯨漁の刺網や、19世紀後半に新たに導入された西洋式の農具などは、展示される「アイヌ文化」の中には含まれていないのです。展示は多くの場合、実際に存在した生活の中の極めて限られた側面を再構成した姿である、と言わなければなりません。

歴史性が欠落した「伝統的」な暮らしが展示されるようになった背景には、明治以降の研究の歴史も深く関わっています。当時の多くの民族学研究者は、和人の影響を受けて急速に「同化」し「失われていく文化」という視点でアイヌ民族を捉えており、実際に目の前に暮らすアイヌ民族の生活ではなく、各地の「古老」を訪ね、「古老」が覚えている限り古いことを記録しようとした。こうした視点では、「和人の漁場で働いていた」、「大規模な農耕に取り組んだ」といった要素はアイヌ民族の「本来の暮らし」ではないノイズと見なされがちでしたから、蓄積されたデータは事実のある側面をとらえていつつも、歴史的な物の見方から分離し、いつどこのもとも言えないような漠然とした過去の像を結ぶことになってしまったのです。

1980年代以降、歴史性を欠いた「伝統的」アイヌ文化像に対する批判的な検討もなされるようになりましたが、それが今日もなお広く展示に採用されている背景には、予備知識がない状態でも魅力的な「異文化」に触れる感覚で展示を楽しむことが可能で、しかも

過去数百年のあいだに和人とアイヌ民族の間に生じた複雑な歴史的事実にほとんど触れずに済むだけに、見る側にとっても見られる側にとっても心理的な負担が小さいことがあるのかもしれませんが。最近ではアイヌ民族の中からも、文化の素晴らしさ、美しさ、楽しさを入り口に、まず肯定的なイメージを持つところから始めてほしいといった声があり、深く傾聴しなければなりません。ただしそれだけでは、世界の全ての文化と同様にさまざまな変化を経験してきたはずのアイヌ民族の歴史に対する理解から遠ざかることになりかねない危うさもあります。近代以降、アイヌ民族の文化の中で何が受け継がれ何が受け継がれなかったのかを資料から明らかにし、その変化の背景に何があったのかを不断に問い続け、現代にいたる人々の歩みを跡付ける。そうした目的意識をもった歴史学的な民具研究の方法論を模索する必要があります。



昨年は編袋の調査を実施した

今春は、2018年度に採択された科学研究費補助金「考古学的分析手法を導入した博物館収蔵アイヌ民具資料の基礎的研究」（2018～2021年度）による研究が2年目となります。まだ始まったばかりではありますが、着実な研究を積み上げ社会に還元していきたいと考えています。

トピックス

冬のはっけんイベント 大好評

寒い冬がやってきました。この時期客足は落ちるものですが、今年は「生命のれきし」展を開催していたこともあってか、はっけん広場は超満員でした。12月は毎年恒例のしめ縄づくり。例年ほぼ定員という賑わいを見せます。「スゲではなく稲ワラを使うのが良い」とおっしゃって玄関に飾る玉じめや小さな輪じめをたくさん楽しそう

に作っていかれます。1月は今年の干支にちなんで「羊毛でイノシシをつくろう」という企画でしたが、毎日順番待ちになるほどで、剥製のイノシシと作った羊毛のイノシシを並べて写真を撮っていく方もいました。1月末からはこの季節にぴったりの雪の結晶のしおり作りです。上空の気温によって結晶の形が違うので7種類の型を用意しま

した。キラキラした結晶にしたいくて紙は白のほか銀紙とラメ入りのりを準備しました。迷わず銀紙を選ぶ子、ラメ入りのりを隙間ないほど塗る子。みんなキラキラの結晶を作っています。厳しい冬も終わり結晶のイベントも終わりました。まもなく春がやってきます。

(解説員 福島奈緒子)



はっけんイベント「しめ縄づくり」



はっけんイベント「羊毛でふわふわイノシシをつくろう」

国立科学博物館・巡回ミュージアム「生命のれきし」を開催

国立科学博物館連携推進課 濱村伸治

平成30年12月8日(土)～平成31年1月20日(日)の間、北海道博物館および北海道歴史文化財団と国立科学博物館の共同主催で、企画展 国立科学博物館・巡回ミュージアム「生命のれきしー君につながるものがたりー」を実施しました。冬場にも関わらず1万3千人を超える方に来場いただきました。

地球の誕生から現代にいたるまでの生命の歴史を、化石標本を中心に紹介する今回の展示は、国立科学博物館の資料を地域でも展開できるように制作した巡回用展示の初めての実践でした。同時に、地域博物館との展示や学習プログラムの協働を通じて、それぞれの今後の博物館活動を魅力的にしていくという、国立科学博物館の連携事

業の一環でもあります。

イベントでは、小さな子に博物館に親んでもらう「えほん meets 博物館」等を実施しました。2館が一緒になって事業を計画・実践することで、お互いのノウハウや発想を共有でき、国立科学博物館にとっても今後の活動のヒントになりました。

平成30年度は、北海道博物館協会とも連携して、道内の博物館関係者向けの研修やシンポジウムの開催も行いました。北海道内の博物館の今後の活動の、より一層の充実に向けて、今後も様々な形で連携をしていければと思っています。



アイヌ民族文化研究センターだより

「清野写真館旧蔵写真」その後

『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』では、毎年、当館が新たに受け入れた資料の中からいくつかを選んで紹介する、「新着資料紹介」を掲載しています。2018年3月に発行した第3号では、「釧路市・清野写真館旧蔵写真」を取り上げました。

これは、昭和40年ごろまで釧路市米町にあった「清野写真館」が持っていた写真で、写真館を営んでいた清野市郎氏のご遺族から寄贈を受けたものです。

昭和初期に釧路で撮影されたものと考えられ、状態が良く、かつ比較的鮮明なので、例えば人々が着用している衣服のようすが確認でき、同じ地域の他の写真などと比較することで、この地域の木綿衣について知ることができると、さまざまな意義や可能性を持つ写真です。

この写真の特徴として、もう一つ、1928（昭和3）年に釧路の春採に設けられたとされる「懐古館」との関連を挙げることができます。

「懐古館」の設立を報じた同年11月20日付けの『釧路新聞』は、同館はアイヌ民族の「宝物」を「収蔵陳列」する施設だと述べており、アイヌ民族の伝統的な生活文化を展示し観覧に供する施設であったことを窺わせます。

「懐古館」設立のころ（1920～30年代）は、北海道への観光客が増え始めるなか、〈アイヌ文化〉が観光や視察

の対象となることがより増えていった時期だとされます。「懐古館」は、1931（昭和6）年に長万部に設立された「エカシケル」などとともに、このような時期に設けられた展示施設として、着目しておきたいと考えていました。清野写真館の旧蔵写真には、「懐古館」の設立を報じる新聞記事に載っている写真（①）と同じ家屋と考えられる建物が写っていました（②はその一例です）。さらに北海道立図書館が所蔵する、アイヌ語研究者・金田一京助の旧蔵絵葉書の中に、これらの写真とほぼ同じ写真を用いたものが9枚確認できました。

ただ、このときは絵葉書についてこれ以上の情報が無かったこともあり、昨年度まとめた資料紹介では、清野写真館の写真は「懐古館」のようすを知る手がかりになりえる可能性がある、ということまでを指摘するにとどめていました。

今年度に入り、この資料紹介を読んだ方が来館され、「この絵葉書が揃って袋に入った状態のものを持っている」とのこと。その画像も見せていただきました。

中でも注目したのは絵葉書が入った封筒です。そこには「釧路市設／懐古館発行」とあったのです。これによって、絵葉書や清野写真館の写真が懐古館で撮影されたことがより確実になり

ました。さらに「釧路市設」との文言は、当時の行政がこうした施策や事業にどのように関わっていたのか、という新たな課題も投げかけてくれます。



③絵葉書の袋

研究紀要に新着資料紹介を載せるにあたり、これまではもっぱら「新しく受け入れた資料について、いち早く皆様にお知らせするため」というふうに書いてきました。けれども、こうした経験で改めて当たり前のことに気付くのですが、いち早く、広くお知らせすることによって、実は博物館の側が、より早く、いろいろな教示をいただけるのでした。

最後になりましたが、このたび貴重な情報をご教示くださった新妻達雄様

に、改めてお礼申し上げます。
（アイヌ民族文化研究センター長 小川正人）



①釧路新聞1928年11月20日朝刊（懐古館写真）



②清野写真館写真の例

活動ダイアリー

2018年12月～2019年2月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

12月1日(土)

■はっけんイベント「しめ縄づくり」が開幕。
(～12月24日の開館日毎日)



12月8日(土)

■国立科学博物館 巡回ミュージアム「生命のれきし」が開幕。(～2019年1月20日(日))



■アイヌ語講座「はじめてからのアイヌ語講座(全3回)」第3回を開催。担当：田村雅史。

12月12日(水)

■収蔵庫の大掃除を実施。

12月13日(木)

■臨時休館。総合展示室の大掃除を実施。

12月14日(金)

■臨時休館。総合展示室ほか館内の大掃除を実施。

12月15日(土)

■特別イベント「えほん meets 博物館」を開催。担当：圓谷昂史、国立科学博物館スタッフ。

■総合展示室クローズアップ展示①～④を展示入替。

①屏風を読む<<江差屏風>>

②北海道の引札あれこれ

③伝承者が生きた近現代 四宅ヤエさん



④1870～1920年ごろの札幌



12月16日(日)

■古文書講座「ゆとり古文書講座(全3回)レベル3」第3回を開催。担当：東俊佑。

■古文書講座「はじめての古文書講座(全3回)レベル1」第3回を開催。担当：東俊佑。

■ちゃれんが子どもクラブ「始祖鳥をつくってみよう！」を開催。担当：表深太・圓谷昂史。

12月22日(土)

■ちゃれんがワークショップ「博物館で新年祈願? 日本の画材で絵馬づくり」を開催。担当：三浦泰之・水島末記・田中祐末。

12月23日(日・祝)

■ミュージアムトーク「生命のれきし展」みどころ紹介」を開催。担当：添田雄二。



12月26日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：山田伸一・佐々木利和。

2019年

1月4日(金)

■はっけんイベント「羊毛でふわふわイノシシをつくろう」が開幕。(～1月20日の開館日毎日)



1月5日(土)

■特別イベント「アロサウルスになってみよう！」を開催。(～1月12日(土))担当：「生命のれきし」展チーム・博物館基盤G。

1月12日(土)

■ちゃれんが子どもクラブ「アイヌ語であそぼう」を開催。担当：田村雅史・大谷洋一。

1月13日(日)

■北海道恐竜・化石ネットワーク研究会主催「北海道化石フェスト'2019」を共催。

■「CISEサイエンスフェスティバル 博物館ひろば」に出席。(～14日)

1月14日(月・祝)

■特別イベント「博物館のバックヤードを見てみよう」を開催。担当：杉山智昭・山際秀紀。

1月16日(水)

■国立科学博物館 巡回ミュージアム「生命のれきし」入場1万人セレモニーを開催。

1月19日(土)

■特別イベント「えほん meets 博物館」を開催。担当：圓谷昂史

1月20日(日)

■古文書講座「脱ゆとり古文書講座(全3回)レベル4」第1回を開催。担当：東俊佑。

■古文書講座「スバルタ古文書講座(全3回)レベル2」第1回を開催。担当：東俊佑。

■ちゃれんが子どもクラブ「始祖鳥をつくってみよう！」を開催。担当：表深太・圓谷昂史。

1月26日(土)

■はっけんイベント「雪の結晶のしおりをつくろう」が開幕。(～2月24日の土日祝)



■ちゃれんが子どもクラブ「貝の化石で標本をつくろう！」を開催。担当：圓谷昂史・栗原憲一・畠誠氏(北広島市エコミュージアムセンター知新の駅)。

2月6日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：会田理人。

2月8日(金)

■第13回企画テーマ展「アイヌ民族の文化財を未来へつなぐ」が開幕。(～4月7日(日))



2月9日(土)

■ちゃれんがワークショップ「羊毛を染める・紡ぐ」を開催。担当：会田理人・尾曲香織。

■総合展示室クローズアップ展示①～②を展示入替。

①屏風を読む

<<松山屏風>>



②開拓使のお雇い

外国人B.S.ライマン

の弟子山際永吾



2月10日(日)

■ちゃれんがワークショップ「羊毛を染める・紡ぐ」を開催。担当：会田理人・尾曲香織。

2月11日(月・祝)

■特別イベント「博物館のバックヤードを見てみよう」を開催。担当：杉山智昭・山際秀紀。

2月16日(土)

■ちゃれんが子どもクラブ「雪のなかで宝さがし」を開催。担当：舟山直治・池田貴夫。

2月17日(日)

■古文書講座「脱ゆとり古文書講座(全3回)レベル4」第2回を開催。担当：東俊佑。

■古文書講座「スバルタ古文書講座(全3回)レベル2」第2回を開催。担当：東俊佑。

2月23日(土)

■自然観察会「ユキウサギを追跡しよう！」を開催。担当：表深太・水島末記・鈴木あすみ・濱本真琴・小川由真(自然ふれあい交流館スタッフ)。

2月27日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：堀繁久・田村雅史。

2月28日(木)

■平成30年度北海道博物館内部評価委員会を開催。

来館者数

○2018年12月～2019年2月

総合展示室 13,460人 特別展示室 15,790人 はっけん広場 3,441人

○累計(2015年4月～2019年2月)

総合展示室 432,654人 特別展示室 320,021人 はっけん広場 102,732人

森のちゃれんがニュース 第15号

発行日：2019年3月26日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2019